

# 朗読会の可能性を考える

—— ボランティア・グループ「山口の朗読屋さん」の視点から ——

林 伸 一

## 1. はじめに

2017年1月18日の22:00-22:59に放送されたNHKの山口発地域ドラマとしてBSプレミアムで『朗読屋』（荻上直子・脚本／関友太郎・演出／吉岡秀隆・吉岡里帆ら出演）が放送された。山口出身の中原中也の作品を主人公が朗読するという内容で注目された。（注1）

また、同年9月8日から11月17日までNHK総合「ドラマ10」として『この声をきみに』が全8回のテレビ番組として放送された。同作品は、大森美香作で、主演は竹野内豊である。主人公である偏屈な数学講師が、授業での話し方を改善したいと訪れた朗読教室で、謎多き女性講師のレッスンを受け、個性豊かなクラスメイトとともに成長していくという展開で、様々なエピソードがコミカルに描かれている。

『この声をきみに』（2017）で朗読指導を務め、「奇跡の朗読教室 人生を変えた21の話」（新泉社）の著者・斉藤ゆき子（57）が朗読について次のように述べている。

「朗読は、教科書や資料を読み上げるような『音読』とは違います。聞き手に向けて、物語の内容を声で表現することが、朗読なんです」。

斉藤ゆき子さんの朗読教室では、まず「あえいうえおあお」や早口言葉などの発声練習からスタートする。次に、生徒同士でペアになり、出題されたテーマで1分間ずつ話す。「聞き手に向かってしゃべる」練習だ。教室には笑い声が広がる。（日刊ゲンダイDIGITAL公開日：2019/09/03「忙しいサラリーマンこそ朗読を 指導者が説く意外な効果」）

その後、斉藤さんが文学作品を配布した。この日の題材はショートショート。一人称での語りが続く文章で、朗読の難易度は高い。斉藤さんのお手本や解説を踏まえ、生徒が順に朗読していく。斉藤さんが「セリフの部分が、自然で生き生きとしていましたね。声が作品によく合っています」と生徒に話しかけるなど、レッスンは和やかに進む。（日刊ゲンダイDIGITAL公開日：2019/09/03同上）

「朗読で身につく力は、たくさんあります。滑舌や声のコントロール力だけでなく、会話が增える、人前で緊張しなくなるなどです。そして、想像力がつきます。朗読では、作品の内容を読み手が頭でイメージできていないと、聞き手にも伝わりません。これらの力を通して、コミュニケーション能力がアップしますよ」と斉藤ゆき子さんは述べている。

例えば、生徒の1人で、長年仕事優先の生活をしてきた男性は、「いつも命令口調」「デリカシーがない」と家族に非難されていたが、朗読教室で想像力が鍛えられたことがきっかけで、相手の気持ちを理解し、言葉遣いも優しくなったという。ドラマ10の『この声をきみに』の主人公を想起させる話である。

他にも、斉藤さんの生徒には、伝わるプレゼンテーションをするため、毎年株主総会前に個人レッスンに来る企業の重役もいるとのこと。

「男性は女性と比べて、普段の会話や読みに『硬さ』がある人が多いんです。でも、ただ読み上げるだけでは、相手に言葉が入っていきませんよね。恥ずかしさや照れを払拭して表現力をつけると、相手に伝わる。仕事で忙しい男性にこそ、朗読はオススメです」(斉藤ゆき子さん)。朗読教室に限らず、男性の習い事参加者は、少ないのが現状であろう。

ドラマ『この声をきみに』放送以後、朗読教室は全国で急増しているとのこと。講師の理念やスキルは様々なので、体験教室で、講師との相性や教室の雰囲気を確認してから、入会することが望ましいであろう。情感豊かに大きな声を出すと、気持ちもポジティブになること請け合いだとの声が聞かれる。

## 2. 「こころが温まる朗読の世界」として朗読教室スタート

### 2-1. やまぐちカルチャーセンター朗読教室内の発表会

2016(平成28)年4月から山口市のやまぐちカルチャーセンターで「こころが温まる朗読の世界」という講座名で朗読教室が、受講生7名でスタートした。金子みすゞの詩や『こころのチキンスープ』(ジャック・キャンフィールド、マーク・V・ハンセン著、ダイヤモンド社)、絵本、紙芝居などを教材に朗読の練習が行なわれた。(林 2019a参照)

同年7月25日には、第1回目の発表会を行い、金子みすゞの詩やレオ・レオニの『フレデリック』、紙芝居の『ももたろう』、佐野洋子『おじさんのかさ』(絵本)、景祥明『しあわせってなあに?』(絵本)などを受講生が朗読した。参加者は15名ほどであったが、子供の参加はなかった。紙芝居や絵本という子供向けの内容と思われがちであるが、大人の心にも響くものであることを示す機会となった。

同年10月17日には、第2回目の発表会として、「紙芝居で味わう昔話の世界」を企画し、瀬戸内寂庵「月のうさぎ」(講談社)「つるのおんがえし」「ふるやのもり」(福音館書店)「豆っ子太郎」「金色夜叉」(雲母書房)などの紙芝居を会員5名が上演し、10名ほどが参加した。

2017(平成29)年2月20日には、「中原中也の詩を味わってみよう!」と題する第3回目の朗読会を行なった。中原中也記念館館長の中原豊氏をお招きして、パワーポイントで大きく映し出された中也の詩を受講生7名が朗読した。朗読には、その場の即興でChifumi(上利千富美)さんによるハーブの伴奏が花を添えた。20名ほどの参加があった。

同年4月からは、「やまぐちカルチャーセンター」の朗読教室の講座名を「街の朗読屋さん」に改めた。それは前項で触れたNHKのBSで放送されたドラマ『朗読屋』に強く影響を受けたこともある。(林 2019a参照)

同年7月31日には、「紙芝居で伝える戦争体験」というテーマで第4回目の発表会を実施した。「のばら」「平和のちかい」(童心社)「峠の老い桜」「父のかお 母のかお」(雲母書房)などの戦争と平和の問題を考える紙芝居を4名で朗読した。当日の参加者は10名ほどであったが、NHKテレビの取材も受け、発表会の内容が放送された。

2018(平成30)年3月5日には、第5回目の「街の朗読屋さん発表会」を行った。詩集『そこに光があるから』の著者北川暢子氏を招いて、会員6名が詩集の中の詩をそれぞれ朗読する

という内容で、Chifumi（上利千富美）さんのハーブによる即興伴奏と演奏が花を添えた。卒業生二人の朗読も加わった。当日は、宇部日報の取材を受け、3月7日付で写真入り記事が掲載された。参加者が、教室の定員20名を超えたため、やまぐちカルチャーセンターから、以後の発表会は、教室外で会場を借りて実施するように要請があった。

## 2-2. 教室外での発表会形式の朗読会

2018（平成30）年6月23日には、山口市後河原の「ギャラリーカフェつるかめ」で第6回目の「街の朗読屋さん発表会」を行った。会員10名による大型絵本や紙芝居が上演された。同日は劇団はぐるま座の特別出演として「動けば雷電のごとく」の紙芝居も上演された。参加者は、20名ほどであった。以降、教室外では、受講生ではなく会員とする。

同年8月4日には、山口県立図書館第2研修室で「平和を考える紙芝居と絵本+お話し会」を「街の朗読屋さん」の主催で行なった。第7回目の朗読会となり、「のばら」「平和のちかい」「峠の古い桜」「父のおか母のかお」などの紙芝居や大型絵本「かわいそうなぞう』『おしっこばうや』（ウラジミール・ラドゥンスキー作、木坂涼訳、セーラー出版）『火のカップ』（うるしばらともよし 著／やまなかもこ 絵／発行：国土社）などの絵本の朗読、沖縄の相良倫子さんの詩「生きる」の群読を行った。当日は、毎日新聞（右記事参照）、宇部日報、長周新聞の取材を受け、後日取材記事がそれぞれ掲載された。

2018年(平成30年)8月5日(日) 毎 日 新 聞

**平和を考えるきっかけに**  
 県立山口紙芝居 絵本など朗読

戦争や平和をテーマにした紙芝居や絵本、詩の読み聞かせをする催しが4日、山口市後河原の県立山口図書館であった。県内子ども登壇な

いようにと主催。講座受講者7人が語り部として、原爆妻を失った男性や娘を亡くした母親の苦悩を描いた紙芝居「平和のちかい」や、空襲に備えて動物の殺処分を命じられた動物園の飼育員と象の絆を伝える「かわいそうなぞう」などを、参加者約20人が語りかけた。時折声を取り上げ、涙交じりの朗読に参加者は真剣な表情で耳を傾けていた。

語り部として参加した同市道場門前の山本加代子さん（67）は「紙芝居や絵本で平和を考えるきっかけにしてほしい。何気ない毎日がどんな幸せか感じとってくれたらうれしい」と話していた。

平塚裕介

同年9月16日には、「ギャラリーカフェつるかめ」において、「街の朗読屋さん・秋の朗読会」を開催した。第8回目の朗読会となり、「一寸法師が後河原にやってくる！」と題して実施した。山口市教育委員会の後援、山口県教育カウンセラー協会との共催で開催することができた。なお、第一部は、絵本「一寸法師」、紙芝居「こぶとりじいさん」「したきりすずめ」「はだかの王さま」（教育画劇）などの上演があり、第二部では、詩集『そこに光があるから』（ゆり書房）の著者北川暢子氏を招いて、会員9名が詩集の中の詩を朗読した。

また、当日の参加者による朗読の時間も持たれた。

同日は、卒業生の山田一男氏（90歳）が、埼玉県川越市から駆けつけてくれたので、朗読会の後で卒寿を祝う夕食会がカフェ「おてま」（山口市中園町4-8）で開かれた。山田氏によると「一人暮らししていると一日中何も言わない日もあるが、声を出して、朗読の練習をするると心の健康にもつながる」とのことであった。

同年12月8日（土）1時半～4時半、小郡図書館2階会議室にて第9回目の朗読会「心温ま

る冬の朗読会～あなたも読んでみませんか～」を実施した。

山口の朗読屋さんとしては、「子どもから大人まで参加できる朗読会」として企画したのであるが、大人のみでの参加であった。ただし、外国人留学生2名の参加があった。

第1部は、山口の朗読屋さんによる以下の紙芝居・絵本などを上演した。

紙芝居「かさじぞう」（田中範明）絵本「どうぞのいす」（藤村富士子）大型紙芝居「おとうさん」（金崎清子ほか）朗読「あらしのよるに」（内藤充子）翻訳書「最後までとわかっていたなら」（荒井佳恵・林伸一）絵本『もしも、ほくがサンタクロースとともだちだったら』（富安陽子さく／YUJIえ／朗読担当：林伸一）

第2部は、参加者による朗読・ブックトーク（一人5分程度：作品自由）が行われた。山口市教育委員会と山口県教育カウンセラー協会の後援を得て実施された。

### 2-3. 訪問公演形式の朗読会（「ハートホーム平川」「ケアパートナー防府」「防府幸楽苑」「玉鶴老人大学講座」などの老人施設）

#### <2017（平成29）年>

9月13日には、下松老人福祉会館での「玉鶴老人大学講座」に招かれて、紙芝居「愛染かつら」（雲母書房）「よだかの星」「眼鏡屋と泥棒」（童心社）を会員4人で分担して上演した。当日は地元のケーブルテレビ「Kビジョン」の取材を受け、講座の内容が放送された。

同年11月26日には、ハートホーム平川（老人ホーム）への第1回目の訪問公演を行った。高齢者向け紙芝居「愛染かつら」や「よだかの星」、落語紙芝居の「眼鏡屋と泥棒」を会員6人で分担して上演した。

#### <2018（平成30）年>

1月22日には、ハートホーム平川にて第2回目の訪問公演を1時間（午後2時～3時）行なった。日本の昔話の紙芝居「かさじぞう」（童心社）「はなさかじい」「ももたろう」「おむすびころりん」「かぐやひめ」（いずれも、教育画劇）の5本を5人で分担して上演した。

同年3月26日にハートホーム平川に第3回目の訪問公演を行なった。紙芝居の「金色夜叉」と「続金色夜叉」を朗読劇風に6人で役割を分担し、衣装をつけて上演した。「金色夜叉の歌」も入所者とともに歌った。紙芝居の前座として、「金色夜叉」をめぐる会員による漫才も披露した。

同年5月28日には、ハートホーム平川への第4回目の訪問公演を行った。大型絵本の「だるまさんが」「スイミー」「フレデリック」「パパ、おつきさまとって」「かわいそうなぞう」「おおきなかぶ」を会員10名が分担して演じた。なつかしい童謡「いぬのおまわりさん」などを入所者とともに歌う時間を持ったところ好評であった。

同年6月10日には、ケアパートナー防府（デイサービス施設）への訪問初公演を行った。ここでは、高齢者向けの紙芝居「愛染かつら」「金色夜叉」の上演を歌を交えて行った。

同年7月23日には、ハートホーム平川への第5回目の訪問公演を9名で行った。紙芝居「のばら」や絵本「きつねとぶどう」などを上演した。

同年9月9日には、ケアパートナー防府（デイサービス施設）への第2回目の訪問公演を行った。絵本の「一寸法師」「かわいそうなぞう」「きつねとぶどう」、紙芝居の「みいちゃんの秋」を演じながら、利用者さんと童謡を歌った。

同年9月12日には、下松老人福祉会館での「玉鶴老人大学講座」に招かれて、紙芝居「金色夜叉」「したきりすずめ」「はだかの王さま」「みいちゃんの秋」「鶴柿」を上演した。

同年9月17日には、ハートホーム平川への第6回目の訪問公演を行った。絵本の「一寸法師」と「はだかの王さま」を街の朗読屋さん8人で登場人物の役割を決め、朗読劇風に朗読した。紙芝居の「したきりすずめ」「みいちゃんの秋」を演じた。以降、季節に合わせて「みいちゃんの○」の中の童謡を入所者と共に歌うことが定番になった。

同年11月7日には、防府幸楽苑にて約50人の利用者を対象に紙芝居「愛染かつら」「おとうさん」「みーちゃんの秋」などを上演し、童謡を利用者とともに歌った。

同年11月26日には、ハートホーム平川への第7回目の訪問公演を行なった。絵本の「どうぞのいす」、紙芝居「おおみそかのおさくさま」「みいちゃんの秋」「みいちゃんの冬」を上演し、童謡を入所者と共に歌った。

#### <2019（平成31）年>

1月28日には、ハートホーム平川への第8回目の訪問公演を行った。中原中也の詩の朗読、絵本の「雨ニモマケズ」「よくばりすぎた猫」、紙芝居「かさじぞう」「三人きょうだい・おさむらいさんのはなし紙芝居」「みいちゃんの冬」を上演し、童謡を入所者と共に歌った。

2月12日には、マザーベル湯田温泉（老人介護施設）への訪問初公演を行った。中原中也の詩の朗読、絵本の「雨ニモマケズ」「よくばりすぎた猫」、大型絵本「せんたくかあちゃん」、紙芝居「かさじぞう」「三人きょうだい・おさむらいさんのはなし紙芝居」、「みいちゃんの冬」を上演し、童謡を入所者と共に歌い、お茶とお菓子を一緒にいただいた。

3月25日には、ハートホーム平川への第9回目の訪問公演を行った。詩集『そこに光があるから』の北川暢子さんが加わり、詩集の中の詩をいくつか朗読し、北原白秋の「五十音」を唱和し、紙芝居「トラより強いカエルくん」「天狗の火あぶり」「みいちゃんの春」を上演し、童謡を入所者と共に歌った。

以上、2017年9月から2019年3月末までの「山口の朗読屋さん」の老人施設への訪問公演の回数は、通算15回にのぼる。

#### 2-4. イベント参加型の朗読会

2018（平成30）年9月22日、23日、24日および10月21日は、開催中の「山口ゆめ花博」の「山の外遊びゾーン」においてピクニックデザイン研究所の企画イベントの一つとして「街の朗読屋さん」が加わった。紙芝居の「みいちゃんの秋」「はだかの王さま」、大型紙芝居「おとうさん」、大型絵本「おおきなかぶ」「おじさんのかさ」「キャベツくん」「くじらだ!」「ぐりとぐらのえんそく」「三びきのこぶた」「スイミー」「ぞうのはな」「だるまさんが」「だるまさんと」「だるまさんの（だるまさんシリーズ）」「にじいろのさかな」「どうぞのいす」「はらぺこあおむし」「みんなうんち」「もりのかくれんぼう」などを会員で分担して演じた。当日の参加者が「ぐり

とぐらのえんそく」を、同じく小学生が「三びきのこぶた」の絵本を朗読した。揃いのTシャツも作成し、それを着用して活動した。

それまでは、前項で示したような老人施設の訪問公演が多かったが、「山口ゆめ花博」では、大勢の幼児や児童が参加してくれたので、大型絵本のレパトリーが一挙に広がった。

同年9月29日(土)はクリエイティブ・スペース赤れんがにて写真楽園Club SEIとのコラボで、「やまぐち朗読Cafeスペシャルー写真と言葉ー」が開催された。写真展出展者のメッセージ朗読および写真をテーマにした朗読会として実施された。「街の朗読屋さん」のメンバー4人が、アーサー・ピナード(作)・岡倉禎志(写真)の『さがしています』(童心社)収録の写真と詩4編の朗読を分担して行なった。

同年10月31日のハロウィンの夜にジャズスポットボルシェで行われた第8回「やまぐち朗読Cafe～朗読と蓄音器ジャズの夕べ～」に参加した。オープニングで「街の朗読屋さん」のメンバー藤村富士子が、10月29日付朝日新聞に宝島社企業広告として掲載された 樹木希林さんの「あとは、じぶんで考えてよ」を朗読した。岡村久美子と筆者が『カウセリングとともに生きる一存在への勇氣』(国分久子/監修 国分康孝/文 図書文化社 2018.6)の一部を朗読した。島田令子が『くじけないで』(柴田トヨ/詩 飛鳥新社 2010.3)より「かぜとひさしとわたし」「ココロギ」を朗読した。(以上、子どもと本のジョイントnet21のブログを参照した：<http://blog.canpan.info/jointnet21/archive/285>)



2019年3月31日にきらら博記念公園多目的ドーム内で行なわれた第44回生協まつりでのテーマ別グループの「ミニステージ」と「ブース」で発表した。「ミニステージ」では、大型紙芝居の「おとうさん」、磯永秀雄の「鬼の子の角のお話」、大型絵本の「せんたくかあちゃん」を披露した。ブースでは、小型の紙芝居や絵本も来場者の要望により、朗読した。大型ステージの音量にかき消されて、声が届かないこともあった。それまでの活動を写真パネルにして展示した。

## 2-5. 公的助成を得ての朗読会

2018(平成30)年度の一般財団法人「県民活動支援事業」を受けて、前述の11月7日の防府幸楽苑への訪問公演や12月8日の小郡図書館での朗読会「心温まる冬の朗読会～あなたも読んでみませんか～」を実施することができた。

会員の訪問公演会場までの交通費やコピー代なども支援事業として助成された。

また、2019(平成31)年からは、山口県の「やまぐち若手文化人等スキルアップ支援事業」の助成を受けて、以下の朗読会を実施することができた。

「福田百合子が中也を語る」朗読+お話を通算10回目と11回目の朗読会として山口県立山口図書館第1研修室にて1月13日(前編)、2月24日(後編)の両日実施した。中原中也の『汚れっちまった悲しみに…』(福田百合子監修、石井昭影絵、新日本教育図書)をテキストにして、山口の朗読屋さんのメンバーが中也の詩を朗読し、中原中也記念館名誉館長の福田百合子先生に、中也の詩の背景や内容の解説、エピソードなどを話していただいた。



2-5-1. 「福田百合子が中也を語る」朗読＋お話し会 1月13日（前編）

1月13日は、第1研修室がほぼ満席になる40名の参加で、山口新聞の取材を受け、次に示す記事が翌日掲載された。また、TYS（テレビ山口）の取材を受け、テレビニュースとして放送された。

三郷郵便物認可 2019年(平成31年)1月14日 月曜日 山口新聞

# 中也の詩解説、朗読も

## 山口 記念館名誉館長・福田さん囲む会

山口市の中原中也記念館名誉館長の福田百合子さん(90)を囲むイベントが13日、同市後高原の県立山口図書館であった。参加者約40人が同出身の詩人・中原中也(1907～37年)の詩の朗読を聞き、福田さんが詩の背景や意味などを解説した。

福田さん監修の影絵絵本「中原中也 汚れっちまった悲しみに……」に収録された詩の中から「サーカス」「舞臺」「悲しき朝」「汚れっちまった悲しみに……」など9編を紹介。市内外で本の読み聞かせに取り組み「山口の朗読屋さん」のメンバーがスクリーンに絵



中原中也の詩の背景などを語る福田百合子さん(13日)山口市

本の影絵を写しながら詩を朗読した。福田さんは中也がフランス語の翻訳を手掛けていたことなどから、フランス詩のソネット形式(14行詩)などを解説。中也が「サーカス」を気に入り自ら読み聞かせていたことや、詩の

言葉とは対照的に手紙には言葉を使っていたエピソードなども紹介した。福田さんは「中也の詩に朗読、影絵、解説の3方面から光を当てて」と面白さが出る。この機会に改めて中也に興味を持ち、詩を「読んでもらうきっかけになれば」と話した。県の「明日の文化人育成プロジェクト」の助成を受けて、山口の朗読屋さんが2回に分けて実施する。次回は2月24日に開かれる。問い合わせは、林伸一代表(電話090・6415・8203)へ。

山口の朗読屋さんのメンバーにとっては、練習のプロセスを含め、詩の朗読の場合の発音・発声の仕方、絵本の読み聞かせの仕方、人前でのパフォーマンスの仕方などの面でのレベルアップにつながった。朗読者と解説者とパワーポイントでの映像の三者のコラボレーションの可能性と発展性についても、その効果を実感し、次のコラボ企画につながる創造性への示唆を得ることができた。

実施にあたっては、あらかじめ次のような朗読プログラムと時間進行表を作成した。10分刻みにしたのは、話が脱線しないようにする工夫でもあった。

表1. 「福田百合子が中也を語る」1月13日（前編）朗読プログラムと進行表

時間	朗読する詩	読み手+福田先生の解説
14:00	開始・会長あいさつ・講師メンバー紹介	林 伸一
14:10	サーカス	内藤充子
14:20	帰郷	荒井佳恵
14:30	悲しき朝	岡村久美子
14:40	夏の日之歌	金崎清子
14:50	宿酔（ふつかよい）	田中範明
15:00	休憩	トイレの案内
15:10	汚れっちまった悲しみに・・・	内藤充子
15:20	生い立ちの歌	荒井佳恵
15:30	早春の風	田中範明
15:40	六月の雨	岡村久美子
15:50	質疑応答	山口短期大学生の朗読*

\*ベトナム人留学生在が『在りし日の歌』に収録されている「湖上」を朗読した。

## 2-5-2. 福田百合子が中也を語る 1月13日（前編）アンケート結果

全参加者40名のうちアンケート回答者27名（男：9人／女：18名）のアンケート集計結果を以下に示す。

<1> この朗読+お話をどのようにお知りになりましたか？ 以下○内の数字は人数  
 チラシ③ はがき⑥ 新聞⑩ 知人・友人⑬ その他③（福田先生から  
 チラシ受取り・やまぐち朗読カフェで知った・県立図書館のビブリオバトで知った）

<2> 特に印象に残った詩・朗読は、どれですか？  
 サーカス④ 帰郷⑤ 悲しき朝② 夏の日之歌⑩ 宿酔（ふつかよい）⑩  
 汚れっちまった悲しみに…③ 生い立ちの歌④ 早春の風① 六月の雨①

<3> 次のどれに興味がありますか？（絵本⑦ 紙芝居⑤ 詩の朗読⑩ 小説の朗読⑧）

<4> 次回2月24日の朗読+お話し会にも参加なさいますか？  
 ぜひ参加したい⑪ できれば参加したい⑩ あまり参加したくない⑩  
 参加できない④

<5> 今回の催しに関して、ご意見・ご感想をご自由にお書きください。

無記入② 記入⑫ 以下に記述内容を示す。

- ・福田先生の解説でよくわかった
- ・中也の詩には、あまり触れたことはなかったのですが、とても興味深い内容があり、おもしろかったです。中也にも興味がわいてきました。
- ・福田先生とのコラボ、最高でした!! 皆さんの詩の朗読、すばらしかったです。先生の博識なこと!
- ・福田先生の解説によって、中也の詩の言葉の奥深さを教えていただきました。
- ・もう一寸朗読のほうも、先生もトーンを一寸上げて頂けるともっと聞きやすいと思われ  
 ます。



- ・とてもなごやかで、福田先生の解説もわかりやすく、楽しい会でした。
- ・自分が読むのと人が読んでくれると、又違った感じでした。とても良かったです。
- ・中原中也の詩を思いっきり楽しみました。福田先生の解説がわかりやすく、知らないことばかりで中也がさらに身近になりました。朗読屋さんの美声も楽しませていただきました。
- ・時間の運びが几帳面で、よいと思いました。朗読と先生のお話、とても・・・
- ・中原中也の詩は、あまり関心がなかったが、今回参加して、感動しました。以後気にかけてゆきたいと思います。福田先生のお話とても感動しました。
- ・福田先生の解説がとても楽しかったです。
- ・とても興味深いお話も福田先生からお聞きできて、楽しかったです。朗読も心に届きました。ありがとうございました。
- ・福田先生のお話とても面白く、わかりやすかったです。次回が楽しみです。
- ・詩を読む、これは感情を込めるべきか、いやいや、普通に読むべきか—と悩む。頭の中では、読める一けれど声に出すのはためらいがうまれる。
- ・詩でない話がおもしろかった。山口市の昔の姿が参考になった。朗読は聞かせるときは、もう少しおさえて淡々と読まれる方が良いと思う。(50代女)
- ・興味深く、参加できました。(60代女)
- ・朗読もすばらしく、福田先生のお話もすばらしく、充実した時をすごさせていただき、ありがとうございました。(70代女)
- ・福田先生のわかりやすいお話、学生時代にもどった気がします。楽しい時間、ありがとうございました。次回参加できず、とても残念です。(60代女)
- ・中也の詩は、難解だと思っていましたが、今日はわかりやすく楽しく学ばせていただきました。よい時間をもてましたこと、感謝いたします。
- ・とても良い企画ですね。中也の詩に対する理解が深まりました。(60代男)
- ・とりあげる作品の数を減らしてでも、一つの作品について、もっとたっぷり解説や背景、福田先生ご自身のことについて聞かせていただきたい。
- ・沢山のエピソードを聞くことができ、とても良かった。(70代女)
- ・こんなに大勢の方が、聴きにいられてびっくりです!! これも福田先生のパワーですね。いつまでもお元気でご活躍ください。(70代女)
- ・こういう会に初めて参加し、心が洗われました。(80代男)
- ・大変面白かったです。朗読も大変すばらしく、心に残りました。(40代男)

<6> 連絡先住所 山口市：㉓ 周南市：② 防府市：① 無記入：①

<7> 次回2月24日に扱う詩は次の9編です。ご自身で朗読してみたい作品名を○で囲んでください。(複数回答可)

作品名：北の海① 頑はない歌② 曇天 一つのメルヘン③  
 幻影 村の時計 冬の長門峡③ 正午丸ビル風景① 童謡

以上

### 2-5-3. 「福田百合子が中也を語る」1月13日アンケート結果についての考察

今回の朗読会で読んでみたい詩に印をしてもらったが、実際には事前に確認すると、前に出て読むことを躊躇し、朗読を辞退する人が多かった。朗読に関心は持っていても、人前で読むことへの抵抗があり、声を出して読むことを躊躇してしまうと思われる。

アンケートの回答に「詩を読む、これは感情を込めるべきか、いやいや、普通に読むべきか」と悩む。頭の中では、読める一けれど声に出すのはためらいがうまれる」と記している人がいた。公立図書館での読み聞かせの指導者や目の見えない人に対する音訳の指導者には、「あまり感情を込めずに淡々と読む」ことを推奨している人が多い。感動するかどうかは、あくまで受け手の問題で、朗読する側が感情を入れて読むのは控えるべきだと主張であろう。見えない人に対する音訳の役割は、点字の役割にたとえられることがある。

ただし、「山口の朗読屋さん」の立場としては、感情を入れて読む、作者に対して共感的に読むことを推奨している。客観的に感情を入れなくて読むことは、ただの音読であって、朗読ではないとする立場である。そもそも客観的に読むことなどできるのであろうか。

間違いなく正確に読むだけでは、AI (artificial intelligence の略: 人工知能) にとって代わられてしまうであろう。すでにスマホで、分からない言葉を検索すると内容を読み上げてくれるサービスが実行されている。AIでは、容易に置き換えられない技としての朗読を目指すことを勧めたい。無味乾燥な読み上げではなく、人間として感情を伴った表現アートの一つとして、朗読を位置付けたい。(注2)

また、別の50代女性のアンケート回答者は次のように記述している。

「朗読は聞かせるときは、もう少しおさえて淡々と読まれる方が良いと思う」。

「もう少しおさえて淡々と読まれる方が良い」という視点は、いわばNHKのニュース原稿を客観的に読むアナウンサーのような視座に立っているように思われる。朗読することを仕事にしている人には、このようなアナウンサーの立場の人と演劇や俳優のように表現アートの立場の人がいる。図書館の読み聞かせが、アナウンサーの立場がいいかどうかは議論の余地があるだろうが、老人施設や児童館などを訪問公演するボランティア・グループとしては、感情を抑えて淡々と読んだのでは、たちまち参加者が寝てしまう。いかに聞き手を寝かせないかは、少々オーバーなくらいの感情表現や強弱をつける必要がある。

特に紙芝居では、読む面の下の方に「演出ノート」が書かれており、「緊迫した調子で」「苦しそうに」「必死に」「自分に言い聞かせるように」「感慨をこめて」などと読む人への注文が書かれている。紙芝居は、絵を媒介にした朗読劇の要素を持っており、芝居がかった演出があってもよいであろう。もっぱら詩や小説を朗読材料にしている人は、紙芝居を朗読の素材とは認めないかもしれないが、紙芝居はりっぱに朗読素材たりえるし、むしろ朗読の入門段階では、紙芝居から入ることを勧めたい。紙芝居から朗読劇に移行する可能性もある。

図書館の読み聞かせは、絵本だけでなく紙芝居もあるのだから、紙芝居に書かれている「演出ノート」を無視して淡々と読んだのでは、子供たちを話の中に引きずり込むことができないのではないだろうか。

山口(2017)は、おとな向けの音読教材を出しているが、その中に中原中也の「湖上」が取り上げられている。「湖上」のワンポイントアドバイスとして「ロマンティックな恋の詩です。

情景を思い浮かべながら情緒たっぷりに読んでみましょう」とある。1月13日の朗読会でも、ベトナム人留学生が情感を込めて「湖上」を朗読した。

#### 2-5-4. 「福田百合子が中也を語る」2月24日（後編）朗読プログラム

2月24日（後編）実施にあたっては、あらかじめ次のような朗読プログラムと時間進行表を作成した。前編同様10分刻みにしたのは、話が脱線しないようにする工夫でもあった。

表2. 「福田百合子が中也を語る」2月24日（後編）朗読プログラムと進行表

時間	朗読する詩	読み手+福田先生の解説
14:00	開始・会長あいさつ・講師・メンバー紹介	林 伸一
14:10	北の海	岡村久美子
14:20	頑是ない歌	田中範明
14:30	曇天	林園代
14:40	一つのメルヘン	金崎清子
14:50	幻影	内藤充子
15:00	休憩	トイレの案内
15:10	村の時計	林園代
15:20	冬の長門峡	荒井佳恵
15:30	正午 丸ビル風景	内藤充子
15:40	童謡	岡村久美子
15:50	質疑応答	参加者の朗読

表2には、示さなかったが、当日の参加者5名による朗読も行なわれた。

#### 2-5-5. 「福田百合子が中也を語る」2月24日（後編）アンケート集計結果

福田百合子が中也を語る―百合子先生を囲む中原中也詩の朗読+お話会―の参加者47名中の回収された31名（男性8名 女性22名 不明1名）の内訳は、以下の通りである。

40代（1名） 50代（3名） 60代（8名） 70代（9名） 80代（6名）

90代（1名） 無記入（3名）

<1> 朗読+お話会の前編（1月13日）にも参加されましたか？

参加した（18名） 参加しなかった（12名） 無記入（1名）

<2> 象に残った詩・朗読は、どれですか？○で囲んでください。以下○内の数字は人数

北の海① 頑是ない歌⑥ 曇天⑥ 一つのメルヘン③ 幻影④ 村の時計⑩

冬の長門峡⑩ 正午丸ビル風景③ 童謡③ <以上後編・以下前編>

サーカス③ 帰郷③ 悲しき朝① 夏の日⑩ 宿酔（ふつかよい）①

汚れっちまった悲しみに…② 生い立ちの歌① 早春の風⑩ 六月の雨①

<3> 「朗読+お話会」として朗読してから先生のお話（講演）を聞くという形式についてどう思いますか。

わかりやすくてよかった②⑥ 朗読はなくて講演だけでもよかった⑩ 無記入⑤

<4> 今回の催しに関して、ご意見・ご感想をご自由にお書きください。

- \* 詩の作られた背景、中也の心情等、とても興味深く、また百合子先生ご自身の体験されたエピソード等、とても楽しく聞かせていただきました。朗読は複数の方をお聞きすることで、いろいろな読み方があり、その人の個性が表現されているのだと、あらためて感じました。ありがとうございました。(60代・女性)
- \* 非日常のひとつきを過ごせました。(80代・男性)
- \* 福田先生の解説は、切り絵を含め、エピソードや詩の読み方、助詞の使い方の大切さ等、詳しく、有難く拝聴しました。ただ、ひとつひとつの詩の後であったため、詩の世界が途切れてしまって、私は前半と後半位にそれぞれ分けて解説してほしかったです。朗読の世界は世界として楽しみたいと思いました。このように感じたのですが、「童謡」まで進んできて、ゆっくりと聞かせていただけて、このスタイルでも良かったとも思いなおしました。相反したことを書いてすみません。(70代・女性)
- \* 福田先生のお話はわかりやすくとてもよかったです。少し、中也が近くなった。(60代・男性)
- \* 中也の詩の意味するところ、心象について理解が深まりました。(60代・男性)
- \* すばらしい企画で、楽しみに興味深く聴講できました。感謝します。(60代・女性)
- \* 中也の詩の解説を聞きながらの朗読会はとてもぜいたくな時間でした。できれば、福田先生のお話の時間をもっととってくださると嬉しいです。(年齢不詳・女性)
- \* 詩の朗読のあとの福田先生の解説という形式は、よく詩の内容がわかり、よかったと思います。メルヘンの世界にしばしひたりました。ありがとうございます。(80代・女性)
- \* 朗読の後、詩の解説はとてもわかりやすく、ためになりました。読まれる方の口調やトーンによって、趣きが変わり、聞く楽しみが広がりました。(年齢不詳・女性)
- \* 詩の朗読と先生の解説のコラボは、大変心にしみるものでありました。「冬の長門峡」の太田先生の解釈は、邪道です。中也の詩を山口の人たちの朗読で聞いて、中也の声が聞こえてくるようでした。朗読は、すばらしかったです。(80歳・男性)
- \* 山口ならではのぜいたくな企画だと思います。今後も続けてお願いしたいです。福田先生のお色直しも良かったです。もしももう一寸早く13:00頃から始まりますと遠距離の者は助かります。(80代・女性)
- \* 福田先生の解説はとても判りやすく楽しいひとときでした。(70代・女性)
- \* 中也の作品は、思った以上にリズムがあると感じました。「曇天」「一つのメルヘン」「正午」。影絵と私のイメージはギャップがあった。詩を書いた時の中也の状況との関連がよくわかった。声に出してぜひ何度も読んでみたいとあらためて思った。(70代・男性)
- \* 朗読と映像と福田先生のととてもわかりやすくおもしろい説明で、本当に2回とも、とても充実した会でした。(60代・女性)
- \* 文意をとらえて読むということを感じたら良いと思いました。(70代・女性)
- \* 福田百合子先生ならではのエピソードを交えての話はとても興味深かった。(50代・女性)
- \* 山口の朗読屋さんの紙芝居もせっかくなので、ひとつでも上演して下さるとうれいすね。特にちよっと眠気がきそうなときは……。 (70代・女性)
- \* 自分の感性のなさに思い知らされた。(70代・男性)
- \* 大変よかったです。朗読は、おもしろく味わえますね。(70代・女性)

- \*一つ一つの作品についての感想を書きたいところですが、時間もスペースもないので、概括的なことだけ書きます。中也の詩は、多くが初めて出会うものばかりでしたが、共通して感じるのは、30代前後（アラサー世代）が持つ迷い、先行きへの不安感がよく表現されているかなと思いました。「四十にして迷わず」ですが、アラサー世代は、まだ「迷い」のまったただ中。私などは「五十にしてようやく惑わず」です。中也には、山口に戻って、もっと長生きしてほしいですね。（50代・男性）
- \*詩の背景もお話くださり、大変面白く拝聴致しました。長門峡の碑の壺のみかんのお話が面白く笑ってしまいました。また、みかんと欄干が男性と女性の交わりだとは考えたこともありませんでした。60代の（70近く）今までも、百合子先生のお若いころと同じような解釈をしておりましたので、びっくりしております。中也の詩を改めて読もうと思います。（60代・女性）
- \*中也の詩が文字ではなくて立体的な世界となってせまってくるような、現実だけど少し現実でないような素敵な時間でした。福田先生のお話が面白く、興味深くて、山口と中也が一段と好きになりました。（40代・女性）

以下の項目は省略

#### 2-5-6. 「福田百合子が中也を語る」2月24日アンケート結果についての考察

アンケートの回答に「朗読と映像と福田先生のとてもわかりやすくおもしろい説明」（60代・女性）との好評価がある一方で、「影絵と私のイメージはギャップがあった」（70代・男性）との声もある。確かに、影絵の作者である石井昭氏の解釈が影絵に表れており、読者のイメージとは異なることもあるであろう。前編の「早春の風」をめぐるも、福田百合子先生の解釈と影絵のイメージが異なることや後編の「正午 丸ビル風景」をめぐるも、先生の解釈と影絵のイメージが異なることが語られた。これは、絵本がもつ宿命かもしれない。原作者が文も絵も作成している場合はいいとしても、原作者と絵の描き手が異なる場合には、何らかのイメージの違いがあることは避けられない。

同じ宮沢賢治の「雨にも負けず」であっても、アーサー・ビナード訳／山村浩二絵の『雨ニモマケズ Rain Won't』（今人舎）と柚木沙弥郎編集の宮沢賢治絵本『雨ニモマケズ』（ミキハウス）では、まったく別の詩ではないかと思うほど受ける印象が異なる。

感情を入れて読むか否かという議論の前に絵本の場合には、書き手と描き手の作品に対する情感と解釈が異なることは避けられないであろう。

#### 2-6. 第12回目の朗読会として「春の朗読会」を阿知須図書館で実施

山口県の「やまぐち若手文化人等スキルアップ支援事業」の助成を受けて、2019年3月10日、山口の朗読屋さんの第12回目の朗読会として「春の朗読会」を阿知須図書館で実施した。新たにワークショップ形式を取り入れ、詩の内容をよく理解して朗読する、紙芝居の役になりきって読み聞かせるためのスキルアップに取り組んだ。それまでは、自分なりに練習して観客に向かって朗読することに重点を置いていたが、むしろ観客が参加し、体験することができるワークショップの可能性を見出すことができた。2時間の参加体験型の朗読会として実施された。

阿知須図書館だよりなどに「中学生から大人まで参加できます」と告知したが、残念ながら参加者は大人のみであった。

第1部では、劇団はぐるま座の富田ももこ氏と斎藤さやか氏を講師に「朗読入門ワークショップ」が行われ、早口言葉「生麦生米生卵」、北原白秋の「五十音」、斉藤孝編『外郎売』などで発声練習を行なった。磯永秀雄の『鬼の子の角のお話』『天狗の火あぶり』などを練習した。特に男性の声を女性が出す場合の工夫などを指導していただいた。

第2部では、参加者による朗読の時間を設けた。なかだえり『奇跡の一本松』、福田庄助『いなむらの火』、紙芝居『トラより強いカエルくん』（文・矢崎節夫／絵・すがわらけいこ／教育画劇2009）などを朗読した。ゲスト講師よりのコメントやアドバイスをいただいた。

### 3. まとめと今後の課題

以上見てきたように、朗読会には、教室内で行なうような関係者の範囲に限られるものと、教室外で行なう対外的に開かれた朗読会がある。また、読み手と聞き手の区分が明確に分かれている場合と、希望すれば聞き手も読み手になれる参加体験型の朗読会がある。

読み方の区分としては、あまり感情を入れずに淡々と読む朗読会と作者に共感的に感情移入して読む朗読会がある。さらに対面朗読として1対1または1対数人、数人对数人の少数で行なう朗読会と朗読グループ対多数の観客のような劇場型の朗読会がある。

劇場型の朗読会の場合は、企画・運営を担当するスタッフが必要となる。プログラムの作成（本文中の表1と表2参照）や会場の手配、マイクやスクリーンなどの使用機材の手配や調達、PRチラシや葉書の作成など黒子的な役割を担当するスタッフである。朗読者だけの集まりでは、プログラムさえも用意されていないようなぶっつけ本番のずさんな朗読会になってしまう場合がある。

また、公的な助成を得て、実施する朗読会と独自の財源で行なう朗読会がある。前者の方が計画的で大がかりな催しになることが多く、多数の観客を集めての劇場型の朗読会になることが多い。独自の財源で行なう朗読会は、仲間内の集まりで小規模のものが多く。

さらに朗読を単独で行なう場合とパワーポイントでスクリーンに大写しにして行なう場合がある。後者の場合も、朗読する文章だけを大写しにする場合と絵本や紙芝居の絵や写真を大写しにする場合がある。特に絵本や紙芝居の大写しに関しては、著作権の関係から、出版社や著作権者の許諾が必要となる。作者が国内にいて、存命である場合には、許諾の可能性はあるが、海外の作者ですでに亡くなっている場合などは、許諾を得るのが難しい。

本文中の中原中也の『汚れっちまった悲しみに…』（福田百合子監修、石井昭影絵）をテキストにしての朗読会では、出版元の新日本教育図書が快く許諾してくれたので、映像と朗読と解説の三者のコラボレーション企画が実現した。

『一寸法師』（絵・三輪良平／文・斉藤洋／出版社・アートデイズ）も同様に出版元の許諾が得られたために、映像と朗読劇風の朗読会が実現した。いずれも日本国内に作者がいる場合で、口頭だけでなく書面での許諾申請に応じてもらえた。

ただ、海外の作者の翻訳絵本などは、本文の原作者と絵の描き手がそれぞれ別の国籍である場合もある。そのような場合は、日本の出版社が許諾権を持てるように、出版の際に原作者ま



たは著作権者との間で、取り決めなり、契約を結んでおいていただきたい。「山口の朗読屋さん」のようなボランティアのグループの場合は、著作権や映像著作権、人格権などの問題に詳しくないことが多いので、出版元に専門のスタッフを置いて管理してほしいと要望したい。

ブック・トークやリレー朗読、朗読マラソン、ビブリオバトル（知的書評合戦）という様々な形の読書会も朗読会の異形態ととらえることもでき、その実施の現状と問題点、発展の可能性についても今後の課題としたい。（林 2019b参照）

（注1）ドラマ『朗読屋』は、東京ドラマアウォード2017においてローカルドラマ賞を受賞し、2017年11月23日にNHKのBSプレミアムで再放送された。また同年12月10日には、NHK総合放送でも再放送され、2019年12月25日にもNHKのBSプレミアムで再放送された。

（注2）AIの技術的進歩は目覚しく、2019年のNHK紅白歌合戦には、美空ひばりが30年ぶりの新曲「あれから」をCG画像とともに歌い、視聴者を驚かせた。そのAI歌唱の制作プロセスは、2019年9月29日に放送されたテレビ番組・NHKスペシャル「AIでよみがえる美空ひばり」で放送された。作詞とプロデュースは秋元康氏が担当している。番組では美空ひばりの過去の膨大な音声データから、ヤマハ株式会社が開発をすすめている最新の人工知能（AI）技術によって、ひばりの声を現代によみがえらせ、AI美空ひばりとして新曲を歌唱し、人の心を揺さぶらせる可能性を示した。しかも、その歌の中のカタリの部分は、息子さんのために美空ひばりが読み聞かせをした録音テープをAIに学習させ、歌の中に挿入されている。歌だけでなく、朗読さえもAIの力で実現されていることが、驚異である。

### 【参考文献】

齊藤ゆき子（2019）「奇跡の朗読教室 人生を変えた21の話」（新泉社）

日刊ゲンダイDIGITAL公開日：2019/09/03「忙しいサラリーマンこそ朗読を 指導者が説く意外な効果」

林 伸一（2019a）「紙芝居と絵本の活用と再評価―「街の朗読屋さん」の視点から―」山口大学文学会発行『山口大学文学會志』第69巻、pp.21-35

林 伸一（2019b）「ビブリオバトルの現状と問題点―知的書評合戦について―」山口大学文学部異文化交流研究施設発行『異文化研究』第13号、pp.112-120

山口謠司（2017）『心とカラダを整えるおとなのための1分音読』自由国民社、pp.48-49

### <謝辞>

本文中の毎日新聞と山口新聞の記事の転載につきましては、快く承諾していただいたことに心より感謝いたします。また、本文中の写真の掲載も快諾していただいた方に此の場をお借りして、お礼申し上げます。本当にありがとうございます。

（はやし・しんいち）